

冷泉家時雨亭文庫蔵 藤原資経筆『源順集』の本文

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

要 旨

『源順集』の伝本の中でも近年公開された冷泉家時雨亭家文庫蔵、藤原資経筆本について本文的考察を及ぼした。その結果、資経本は多くの誤謬を含む一方、これまで同系の代表的伝本とされてきた正保版本をはじめ、同系他本よりも古態をとどめており、書陵部本・多和文庫本と祖本を同じくする可能性が強いことが明らかになった。

【キーワード】 源順 順集 冷泉家時雨亭文庫 藤原資経 正保版本 歌仙 家集

一、はじめに

源順（延喜十一年〔九一一〕～永観元年〔九八三〕）は本邦初の国語辞書『倭名類聚抄』の編者として知られるほか、『和漢朗詠集』『本朝文粹』に多くの詩句詩文を残し、梨壺の五人の一員として『後撰和歌集』の編纂と『万葉集』訓釈事業に携わるなど、和漢兼作の

才人として多彩な業績を残した人物である。中でも彼の歌作の大半を収めた家集『源順集』は、「あめつちの歌」「雙六盤歌」「碁盤歌」など異型・連作の歌を含んでおり、古くから注目を集めてきた。その主要伝本については、つとに『国宝西本願寺三十六人集』（一九四四年 越後屋書房）、『私家集大成』中古Ⅰ（一九七三年 明治書院）、『合本三十六人集』（二〇〇三年 三弥生書店）などに翻刻され、『新編国歌大観』は西本願寺本系の善本を底本とした校訂本文である。しかるに、近年冷泉家時雨亭文庫の蔵書が公開されたことで、私家集研究は新たな局面を迎えることとなった。『順集』に限ってみても、『冷泉家時雨亭叢書』には新出の五本が影印されており、うち二本は既存の伝本とはその形態を大きく異にしている。時雨亭文庫蔵本を含めた『順集』の本文系統は現在次のように分類されている。⁽²⁾

- 一、(1) 時雨亭文庫蔵資経本系⁽³⁾
- (2) 時雨亭文庫蔵素寂本系⁽⁴⁾
- 二、(1) 西本願寺本系

(2) 時雨亭文庫蔵坊門局筆本系⁽⁵⁾

(3) 宮内庁書陵部蔵「続小草内和歌」(五〇一・四九)

(4) 時雨亭文庫蔵『源朝臣順集』⁽⁶⁾

(5) 時雨亭文庫蔵『順集 白描表紙本』⁽⁷⁾

うち一類本(1)は従来正保版本歌仙家集に代表される系統であったが、永仁元年(一二九三)の書写となる資経本の出現により、その本文は少なくとも鎌倉時代末期まで遡ることが可能となった。したがって、今後同系の本文を用いる場合はまずは資経本を参照すべきかと思われるが、該本には誤謬や不審箇所が少なからず存しており、その点をよくわきまえた上で使用しないと思わぬ陥穽に落ちかねない。そこで本稿では資経本源順集の本文についていささかの考察を及ぼし、その特性を出来る限り明らかにしてみたいと思う。なお、資経本の本文については『冷泉家時雨亭叢書66 資経本私家集 二』(二〇〇一年 朝日新聞社)の影印に拠り、同系伝本については次の略称を用いた。

時雨亭文庫蔵資経筆本…資

正保版本歌仙家集…正

東奥義塾高校蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム67—1

—1—24)…東

彰考館蔵本 巳五・〇六九二三本(同32—284—3)…彰A

内閣文庫蔵 二〇一・四三三本(同19—143—5—23)…内A

有栖川宮家蔵本(同21—30—1—23同)…有

書陵部蔵 五〇一・二七二本(同20—9—17)…書

旧真田家蔵本(同28—21—2—23)…真

陽明文庫蔵 近—サ—68本(同55—332—1—17)…陽A

中田光子氏蔵本(同ナ3—4—1—23)…中

静嘉堂文庫蔵本(佐藤高明氏『天曆歌人の資料と研究 本文資料編』昭59 ひたく書房所載の影印に拠る)…静

多和文庫蔵本(前掲書所載の翻刻に拠る)…多

筑波大学蔵本(ル212—263)…筑

二、資経本の概略

まずは資経本源順集の概要について簡単に触れておきたい。樋口芳麻呂氏の解題によれば該本は二三二首を収め、正保版本、陽明文庫本など同系の主要伝本と同歌数、また乱丁を正せばそれらと同歌序となる。「永仁元九六日校了 藤原資経(花押)」の書写奥書を有し、『素性集』『興風集』『伊勢集』『宗于集』『朝忠集』『元真集』『増基法師集』『清少納言集』『藤三位集』と同じく永仁元年の書写であることが知られる。また、該本には4(風雅)・79(続拾)・86(拾)・127(拾)・219(拾)の五首に集付が施されている。これは該集に限らず資経本私家集全般を通して見られるものだが、樋口氏は「風雅」の集付が勅撰集としては最も新しいことに注目し、『風雅和歌集』は貞和五年(一二四九)の成立だから、資経ならぬ後人(冷泉家あるいは二条関係の人か)の注記であろう⁽⁸⁾と推測する。ちなみに、該本と同系の伝本のうちで「風雅」「続拾」の集付を持つものは、管見に及ぶ限り資経本のみである。特筆すべきは巻末から後表紙裏にかけて、

源順

右京大夫至孫 左馬丞拳男

天曆七年十月補文章生

十年正月廿七日任勘解由長官

応和二年正月廿二日任民部少丞補東宮藏人

三年正月廿八日転大丞

康保三年正月七日叙従五位下

同十二年任下総権守

四年正月廿日任和泉守

天延二年十一月廿五日叙従五位上 治国

天元三年正月廿九日任能登守

永観元年卒 年七十三

のような作者勸物を載せている点だが、同系伝本中この勸物を有しているのは、管見に及ぶ限り他に書陵部本と多和文庫本を挙げるにとどまる。つとに神野藤昭夫氏は書陵部本の勸物に注目し、『三十六歌仙伝』には見えない任官等の日付が明記されていること、また当該勸物が『歌仙伝』の誤りを訂し得ることを指摘しているが、資経本が公開された現在は該本にも目配りをしておく必要がある。ちなみに、資経本と書陵部本・多和文庫本との異同状況を示すと次のようである。

- (1) 十年正月廿七日—十年正月四日 (多)
- (2) 任民部少丞—民部〇丞 (書)
- (3) 叙従五位下—叙従五位下^{省勞} (書・多)
- (4) 同十二年任下総権守—同十六日任下総権守 (書・多)

(1) は多和文庫本のみ「正月四日」とするが、『大日本史料』⁽¹⁰⁾ によれば天曆十年の除目は正月二十七日に行われており、多和文庫本の側に問題があるかと思われる。(2) は書陵部本のみ「任」の字を欠いており、これは書陵部本の誤写であろう。(3) は資経本のみ「省勞」の注記を持たないが、『三十六歌仙伝』は他本と同じく「省勞」の注記を有し、また天延二年条では資経本も「治国」の注記を有していることからすれば、資経本の脱漏とみてよいのであろう。(4) は資経本が「十二日」、他の二本が「十六日」と対立するが、『大日本史料』によれば康保三年春の皇召の除目は正月二十七日である。⁽¹¹⁾

いずれにせよ、資経本の出現により、少なくとも鎌倉末期以前には右の作者勸物を付載した伝本が世上に流布していたとみてほぼ間違いないといえよう。ただし、先の異同状況からも知られるように、資経本の本文には損傷も見られ、むしろ他伝本のほうが古態を伝えているとみられる箇所も少なくない。次節では資経本の本文に立ち入って考察を行うことで、この系統における資経本の本文的位相を探ってみたい。

三、資経本の本文

資経本の本文的特徴としてまず挙げなければならないのは、独自異文の多さである。それらはミセケチ・書入による訂正箇所を含め二四〇余にも上るが、その内実は、

- 三 あらさしと (他本「あらさしと」) うちかへすらん
- 二〇 もかみかはいなふねのみはかやはすて (他本「かよは

すて」

二四 ひも（他本「ろも」）かちもふねしかよはぬ

二七 うゑ（他本「うへは」）つれなくふかき我恋

八四 よのなかをな（他本「なに、たとへん」）

九二 あしたつのかけのみかけのみ（他本「かけのみ」）うかふ

一三二 あさこほりとくるあしたの（他本「あしろの」）

一三七 きみはちよまで君はちよまで（他本「きみはちよませきみはちよませ」）

一四〇 はなのみき（他本「みな」）ひもとくのへに

一四五 わきもこかおみなへしてふあたらなくさ（他本「あたらなを」）

一五八 そよとなる秋のをきたに（他本「おきたに」）

二〇四 ふかみとり松にもあらぬあけの（他本「あさあけの」）

のごとく、誤字・脱字・衍字といった誤謬が大半である。また、該本の見せ消ちは一七を数えるが、それらは資経の手によるものか、あるいは後人の所為によるものかは影印では識別しがたい。いずれにせよ、見せ消ちの大半が「なくなくこゑを」（一三八）・「たかたかさこの」（一五五）など衍字の訂正に終始していることを鑑みると、これらの誤謬は資経の書写態度に起因するものも少なくないと思われる。ただし、

七 はるのなみともいつる水^本のほ

一〇五詞 おとこ女^{本のま、本に}のつにいて、もみちをみる

一三三詞 やまとうた十首^{本マ、}をのれる

一三六 いまさへなをやうれしかるへき^{本ま、}

一五四詞 かみ^{本に}のかみのはもとのくさにて

二二三 あさきりをかりはなになれや^{本マ、}

をはじめ、該本中一五を数える「本」「本マ、」等の注記は、資経本の親本ないしはその祖本自体に誤謬や不審箇所があったことを示唆しており、ほぼ同時期の書写でありながら比較的良質な本文を持つ素寂本に比して、資経本は親本には恵まれなかったようである。

その他、

五三 ちとりなくさほの川きりさほやまのもみちはかりはた

ちなかくしそ

では、他本が有する「さをやまをはせまてによむ」の詞書を欠いている。また、規子内親王前栽歌合歌群では、序文・判詞など散文部を多く含むためか、たとえば、

一四〇詞 おまへのにはに

他本「おまへのにはのおもに」

か、のせうたちはなのまさみちのあそむことはらせ

他本「か、のせうたちはなのまさみちによみあけさせしたかふのあそむにことはらせ」

みつくきして順朝臣のさため申ける判かくなむ

他本「水くきしてたてまつりをくその哥とも順朝臣のさためまうせる判かくなん」

一四八詞 このはきの哥はたれもくおなしさまなれとすたくな

といへるわたりめつらしからねと哥めいたり

他本「この萩の哥はたれもくおなしさまなれとす
たくといへるわたりはすこしいひなれたりもちきの
朝臣はきのはにをくしらつゆなといへるわたりめつ
らしからねと哥めいたり」

のごとく脱漏が目立っている。さらに誤写から派生した転化本文として、

一〇三 ねかひかね(他本「わかひかん」) みあれにつけてい
のる事なるくすもまつきこゆなり

などの例があり、

一二二詞 右兵衛督あたらしくてうするひやうふのれうに二月八
日(他本「正月一日」) 人のいゑにやり水むめの花あ
り

に至つては、いかなる過程を経て「二月八日」に転化したのか興味
深いところである。

以上、資經本の欠点ばかりをあげつらつてきた感があるが、次の
独自異文については単なる誤写とは思えないふしがある(*は他系
統の本文を示す)。

七 ほのくとかあしのうら(他本「あかしのはま」)を
みわたせははるのなみともいつる水^{*}のほ

*坊・統¹²「あかしのうら」 朝・白ナシ 素「アカシ
ノハマ」

元日

五四 きのみまでゆきこもれりしみよしの、かすみはけふや
たちてそふらむ(他本「そむらん」)

*西「たちてそふらん」 坊「たちそむらん^{ハシム}」 統「立
てそむ覧」 朝「たちてそむらん」 白「たちいてそ
むらん」 素「タチハシムラム」

あらたうつ所に

五七

をりたてはうらまでひつるたもとゆへなにうちかへす
たもと(他本「あらた」) なるらん

坊「たもと^{}なるらん」 西・統・朝・白・素「あら
田なるらむ」

八四

よのなかをな^{マコ}に、ふゆをあさみ(他本「ふゆのよを」)
ふるとみるまにけぬるあわゆき

*西・統・素「冬をあさみ」 坊「冬さむみ」 朝・白
ナシ

一五七

ふもと、もみねともわかす(他本「みえす」) 秋きり
のたちなはそらになにかみゆへき

*西・坊「峯ともみえす」 統・朝・白ナシ 素「ミ
ネトモワカス」 十卷本歌合「みれともみえす」・廿
卷本歌合「みえねとみえす」

二九二詞

又たのあひたに(他本「またのあひたに」) かりする
人あり

*西「のに」 坊・白「又たのあいたに」 統「たのほ
とりに」 朝・素「またの、あひたに」

七は資經本のみ「あかしのうら」の本文を持つが、これは資經本
系に限ったことではなく他系においても「うら」「はま」の対立が
見られる。平安時代の和歌用例としては前者が優勢だが、

おもひくれなげきあかしのはまによるみるめすくなくなりぬべ
らなり¹⁴⁾ (六帖・三・はま・一九一八)

はらだちしなみいづかたによりにけんおもひあかしのはまはわ
れにて (二条撰政御集・一二二)

など、後者の例も少数ながら見出され、その蓋然性はにわかには決
しがたい。ただ、定家の監督下で書写された坊本と、親本ないしは
その祖本が定家の周辺にあったとみられる続本が「あかしのうら」¹⁵⁾
の本文を有していることは興味深いといえよう。

五四は資経本のみ「たちてそふらん」であるが、他系統では西本
が資経本と同文であり、その他「たちてそむらん」「たちはしむらむ」
の本文が鼎立する。後二者でも歌意は通じるが、当該歌は、

たごの浦に霞のふかく見ゆるかなもしほのけぶりたちやそふ
らん (拾遺集・雑春・一〇一八・能宣)

と同様、「立ち添ふ」の語を効かせて、「昨日までは冬籠りというこ
とで雪に埋もれていた吉野山には、元日の今日は春霞が立ち加わっ
ているのだろうか」と詠んだところに一首の眼目を見るべきであろ
う。とすれば、資経本の本文は西本同様、古態をよくとどめたもの
といえそうである。

五七は他本の「あらた(荒田)なるらん」に従うべきであるが、
他系では坊本も資経本と同様の誤写を犯している。単なる偶然かも
しれないが、資経本系の本文が書承の過程で坊本系の本文と何らか
の接触を持ったことも予想されよう。

八四の第三句は資経本のみ「冬をあさみ」、同系他本は「ふゆの
よの」とする。しかし当該歌は「冬がまだ浅く、寒さもそれほど厳

しくはないので、淡雪が空から舞ってきたと見る間に消えてしまう」
ことを儚さの表象と捉えた歌であり、ここは前者に従うべきであろ
う。資経本が西・続・素本と同文である点からしても、同系他本の
「ふゆのよの」は明らかに転化本文と認めてよからう。ただし、注
意しておきたいのは、同系伝本の中では書陵部本のみが「ふゆのよ
の」の傍らに「ヲアサミ或」の書入を有している点である。書陵部
本の本文は同系他本の中では資経本と最も親しく、資経本と祖本を
同じくしている可能性が強い。

一五七は規子内親王前裁歌合歌の一首で、「しをに」題の一五五
・一五六の判歌である。資経本のみ「みねともわかす」の本文を持ち、
しかも素本と同文である。判詞中では一五六「しら雲のか、りしを
かも秋きりのたてはやそらに山のみゆらん」をめぐって、

川ぎりのふもとをこめて立ちぬれば空にぞ秋の山はみえける

(寛平御時后宮歌合・一七・深養父／拾遺・二〇二・深養父)
の古歌を引き、「おとりになんみえける」と難じていることから、
ここは同系他本の「みえす」に蓋然性が認められそうである。ただ、
本文的には資経本と素寂本との共通異文例にあたり、一類本の性格
を考える上で看過できないものがある。

二九二は天元二年屏風歌の題詞であり、読点を付して全文を示す
と「いけ水にもみち、りうかふ、水とりをり、むまにのれる人ゆき
すく、そらのきりの中に、又たのあひたにかりする人あり」となる。
資経本系諸本は波線部と傍線部の間に脱文があり、本来は「鴈なき
てわたる」(西)、「かりあり」(坊・朝・白・素)のような本文を有
していたはずである。同系他本の「またのあひたに」は文意不通で、

他系の「又たのあひたに」「又の、あひたに」のいずれかを誤写したものであろう。ちなみに、当該屏風歌は恵慶・兼盛も同時に詠進しているが、¹⁰⁾両家集の題詞は「田のほとりに、かりする人あり」（恵慶集・三四）、「山田に女あり、かりする人にもいふいらへに」（兼盛集・一九二）であることを勘案すると、資経本および坊・白本の「又たのあひたに」が原態である可能性が強い。続本「たのほとりに」はおそらくその派生本文であらう。

以上、資経本の本文的特徴について概観してきた。資経本は誤写・誤脱・衍字などの誤謬が多く、使用に際しては注意が必要であるが、その反面古態をよく伝えている面もあり、該本に比べると他本の本文は経年劣化が進行している感は否めない。その中でも書陵部本の本文は資経本に最も近く、両本は同一祖本から派生したとみられることから、それらの共通異文を抽出していけば資経本の性格がより明らかに becoming くるのではあるまいか。次節ではその点について検討してみたい。

四、資経本と書陵部本 付 多和文庫本

資経本と書陵部本との共通異文は、それに類する例をも含めると計四〇余箇所¹¹⁾に及ぶ。それらの中には、たとえば、

一 おほせ事をいか、そむかむ（他本「おほせことをは」^{本（抹消）}）

*西・続「おほせことをは」坊「おほせことをは」^{本（抹消）}

朝・白・素ナシ

一三三詞 せめてまたりて（*他本「きたりて」こふに^{本（書ナシ）}）

*西「せめてかたらふに」坊「せて」続「せめにきたりこふ」朝「せめてこふ」白・素「せめてきたりこふ」

のように、書陵部本が資経本と同様の誤りを踏襲している例も見受けられ、既述のごとく両本が同一祖本から派生している可能性を示唆している。また、

五八詞 二月はなつまの（正・有・陽A・筑「二月はつむまの」

東「二月つむ」中「二月はつむまの」^{三藏 彦藏} 彰A・内A・

真・静「三月はなつむ」所

*西・坊・朝「三月はなつみのところ」白「三月は

なつみところ」続「三月はなみところ」素「三

月はなつむところ」

の例は、本来「三月」「はなつみの」とあるべき本文が「二月」「はなつまの」と誤写され、さらにそこから「はつむま」へと変容していく過程が看取される。そもそも五八の歌は、

五八 いかにしてはなにはつまし花のかを袖につみつるつみ

もこそうれ

のごとく花摘みを主題とした屏風歌であり、しかもその二首前には、

二月はつむまいなりのやしるにまうつる人に

五六 いなり山をのへにたてるすきくにゆきかふ人のたへぬ

けふかな

という稲荷詣の歌が置かれていることから、「はつむまの」は後世の付会による転化本文とみられよう。彰A本以下四本はおそらく他本による校訂が反映された本文と推察されるので、当該箇所に関し

ては資経本・書陵部本が同系本文の古態を最もよく伝えているといえそうである。

さらに、両本の共通本文は他系の本文と合致するケースがまま見られ、正保版本など同系伝本の誤謬を訂しうる例も少なくない。次に主な例を挙げてみよう。

五二左 いかなれやとおほめく〔内A・彰A「おほめきて」

他本「おほめて」〕さためなし

*西・坊・続・素「おほめく」 朝・白ナシ

八四 よのなかをななまに、ふゆをあさみふるとみるまにけぬる

〔正・有・中・静「きぬる」 他本「きゆる」〕あわゆき

*西・坊・素「けぬるしらゆき」 続「かつきゆる雪」

朝・白ナシ

九六詞 四月うのはなさけるいゑに〔他本「室に」〕ほと、き

すを待

*西・朝・白・素「いへに」、坊・続「ところに」

九六 ほと、きすをきて〔彰A「さかそ」 多「きゝて」 他

本「きかて」〕まつよはあけにけりほのにうのはなし
ろくみえゆく

*他系統「おきて」

九七 もみちはをそま山川にふきつめはふねにもくれの〔他
本「舟にしぐれの」 秋はきにけり

*西・坊・「ふねにもくれのあきはきにけり」 続・素

「ふねにも秋のくれはきにけり」

一二五 わかこまのとさも〔他本「ときも」〕みるへくあやめ

くさひかぬさきにそけふはかけまし

*西・坊・朝・白・素「わかこまのとさもみるへく」
続「わかこまとさもみるへくは」

一四〇詞 おのか心くこころに我もくわれと〔他本「われくもと」〕

*西・素「我もく」と 続・朝・白ナシ

一四〇詞 哥のをとりまさりはさためてやるへきたれしてかうた

さため〔他本ナシ〕申まうさすへきとおほせたまうに

*西・坊・素「うたのおとりまさりはさためてやはあ
るへきたれかさためまうさすへきとおほせたまふ
に」 続・朝・白ナシ

一四〇詞 みやにはおもと人〔他本「思ふ人」〕八人かうちにて

*西・坊・素「おもとひと」 続・朝・白ナシ

二二二 もみちゆへへいつもわすれてあかすかなかへらは〔他本

「いつらは」〕色やうすくなるとして

*他系統「かへらは」

二二三詞 いけ水にもみち、りうかふ水とりをり〔他本「をり」

ナシ〕

*西・坊「みつとりあり」 続「水鳥あたり」 素「ミ

ツトリオリ」

二二三詞 一本説〔他本ナシ〕

*ナシ

五二は天曆五年（九五二）十月晦日、宮中の昭陽舎に撰和歌所が
設置された折の詠歌、

五二 神無月はてはもみちもいかなれやしくれと、もにふりにふるらん

をめぐって村上天皇が下した判詞の一節である。「いかなれや」は右歌の第三句を指し、「おほめく」は「紅葉はどうなったであろうか」という疑問表現を指したものであろう。正本以下八本の「おほめて」は明らかに「く」「て」の字形類似に起因した誤謬であり、内A・彰A本の「おほめきて」は「おほめて」がさらに転化した形と推察される。他系も「おほめく」の本文であることを鑑みると、ここは資経本・書陵部本の本文が原態とみてよさそうである。八四の末句は正本以下四本の「きぬる」では意味が通らず、「け（消）ぬる」に従うべきであらう。他系も「けぬる」が優勢だが、資経本系も正本以下四本に「けい」の傍書が施されており、書承の系譜を考える上で興味深い。東本以下の「きゆる」は「きぬる」を不審とみて改めた転化本文と目される。九六詞書は「いへ」が原態とみられ、同系他本の「室」はおそらく「家」の誤写に起因するものであろう。九六歌本文は正本以下八本が「きかて」とあり、彰A・多本はその転化本文と目される。「聞かで」でも意は通じるが、他系統本はいずれも「おきて」であり、また「起きて待つ」という表現も、

更くる夜におきてまたねば時鳥はつかなる音もいかにかまし

(民部卿家歌合・一一)

中納言行平家歌合に、郭公を

ふくる夜におきてまたずはほととぎすはつかなるねをいかでき
かまし
(万代集・夏・五六二・不知)

のような先例があるので、ここでは「おきて」が原態であるとみた

い。九七は「も」「し」一字の相違だが、他本に従えば下句は「舟に時雨の秋は来にけり」と読まれ、歌意自体が大きく変わってしまう。むろん、「時雨」でも意は通じるが、当該歌は「杣山川」の縁で「暮」に「樽」を掛け、「ふねにも」の「も」を利かせつつ、「山で伐採した材木を流す杣山川に紅葉が吹き積もれば、川面ばかりではなくこの舟にも樽ならぬ暮の秋がやって来たことよ」と興じた一首とみるべきではなからうか。続・素本は「秋のくれ」と語順が逆転しているが、ここはひとまず「舟にもくれの秋は来にけり」が原態であったと考えておきたい。一二五は「五月五日にはにむまひかせて」の題詞を有し、競馬の場面を詠じた屏風歌であることを鑑みると、第二句は「とき（疾さ）もみるべく」が穏当であらう。なお、西本は第五句を欠いており、他系統本では「けふはひかまし」とある。一四〇の三例は規子内親王前栽歌合序の一節であり、いずれも同系他本の誤謬を訂しうるものである。二二一は西本では「もみちゆゑいへもわすれてくらすかなかへらは色やうすくなると」とある。題詞に記された「林の下にあそふ人」の立場から詠まれた一首と思しいが、その第四句は「かへらは色や」「いつらは色や」と対立を見せている。後者ならば「出づらば」と解すべきであらうが、たとえば、

御屏風に、秋ののに花みるところ

はなのいろのあかぬかぎりしかへらずはやどもあきの野辺や
なりなん
(中務集③五九)

はなみるところ

はかなくもけふは山ぢにくらすかなかへらむほどに花はちると

て

(兼盛集・一七四)

のように風狂をモチーフとした作例を勘案すると、前者「かへらば」に蓋然性が認められよう。二二三は同系他本が「をり」を脱したものとみられる。

如上の考察より、資経本・書陵部本の共通異文は資経本系本文の古態をよく伝えており、それらは同系伝本の誤謬や不審箇所を訂しうる事が知られた。そして残る二二三の詞書「一本説」についてであるが、管見に及ぶ限り現存諸本の中でこの詞書を持つものは資経本と書陵部本に限られる。当該歌は万葉仮名で記された、

二二九 進上他本「コ、ロサシ」 深フカク 右葉之菖蒲草ミキハノアヤメクサ 千年五月五日可却チトセノサツキイツカカルヘキ

の上二句を「進上タデマツリアクル 右葉之菖蒲草」としたもののだが、資経本の出現によつてこの別訓を伝えた「一本」が鎌倉末期以前に存在していたことが判明した。このように見ていくと、江戸初期の書写と目される書陵部本は、資経本祖本の面影をよく伝えていといえよう。ところで、第二節では作者勸物をめぐり資経本・書陵部本と多和文庫本との関係に少しく言及したが、それに倣つて家集本体の本文を検証してみると、多和文庫本の本文は書陵部本に次いで資経本と親しいことが知られる。これら三本の共通異文を一部挙げてみよう。

三二二 へひゆみのはれるるにもあらてちる花はゆきかと山山に
(中「雪かと人山に」 他本「雪かと人山に」) 入人そとへ

八五 *西・坊・続・素「ゆきかとやまに」 朝・白ナシ
よひのまのそらのけふりとなりにけりあまのはらから
なとかつけこぬ (他本「つけ、ぬ」)

*他系統「つけこぬ」

一一七 もみちさへきよるあしろのてにかけて (他本「てをか
けて」) たつしらなみはからにしきかも

*他系統「てに」かけて

一四〇詞 ある所にをとこ女かたわきて (他本「かたりきて」)

*西・素「かたわきて」 坊「うたわかちて」 続・朝・
白ナシ

一六七 あさちふの露ふきむすふこからしに (他本「木枯の」)
みたれてもなくむしのこゑ哉

*西・坊・素「木枯に」 続・朝・白ナシ

右例はいずれも三本の共通異文が同系他本の本文に比して古態をよくとどめていると判断しうる例である。したがって、多和文庫本の本文は書陵部本よりも経年劣化が進んではいるものの、部分的には同系祖本の姿をよく伝えた過渡期的な本文とひとまず位置づけられよう。実際、これら三本の共通本文は正保版本の本文としばしば対立を見せ、後者の誤謬を訂しうる場合も少なくない。次にその例を簡潔に挙げておきたい。他系統本の本文は資・書・多本と同文の場合にのみ掲出する。

二八 たつねきつるそ (資・書・多・東・彰A・内A・真・
陽A・筑) — たつね本 きつる (正・有) たつね本
きつる (中) たつねそきつる (静)

二九 *西「たつねきつるそ」
たちぬれは (資・書・多・東・彰A・内A・真・陽A・
筑) — たちぬれて (正・有・中・静)

三一

*西・坊・続・素「たちぬれは」

まつあしろきに(資・書・多・東・彰A・内A・真・陽A・筑)―まつあしろ木の(正・有・中・静)

*西・坊・続・素「まつあしろきに」

一四〇詞

いふへくも(資・書・多・静)―いふへかも(正・有・陽A・真) いふへかも(中) いふつかも(東) いふつかさも(筑) いふつかさも(彰A・内A)

*坊・素「いふへくにも」

一五三

はなをしつめは(資・書・多・東・彰A・内A)―花をしつめ(正・有) 花をしつめ(中) 花をしつめ(静) 花をしつめ(陽A・筑) 花をしつめる(真)

*西・坊「はなをしつめは」

一六〇詞

よみあけさするに(資・書・多・真・筑)―よみあけさるに(正・東・彰A・内A・有・陽A・静) よみあけさるに(中)

*西・素「よみあけさするに」

このように見ていくと、従来この系統の代表的伝本とされてきた正保版本の本文は古態からずいぶん離れたものであることが改めて看取されよう。その一方、資経本については、おそらく同一祖本から派生したと目される書陵部本・多和文庫本を参酌することで、比較的良質な本文を抽出することも可能である。資経本を利用する際には他伝本を参照の上、誤謬本文と純度の高い本文とを適切に選り分けた上で、その長所を最大限活かしていくことが望ましいと思われる。

五、おわりに

以上、本稿では『源順集』の伝本のうちから冷泉家時雨亭家文庫蔵藤原資経筆本を取り上げ、その本文特性について考察を及ぼしてきた。該本を披見していない立場からこのような拙論をものするとは甚だ僭越ではあるが、ひとまず次のようなことが指摘された。

- (1) 資経本は独自異文を多く含むが、その大半は誤写・誤脱・衍字等の誤謬と思しい。すでに親本ないしはその祖本の段階から損傷を受けていたとみられるが、それだけでは説明がつきにくく、資経の書写態度に起因するものも少なくないと思われる。
- (2) その一方、資経本の本文は部分的には古態をよく伝えており、他本の中では書陵部本の本文に最も近い。両本は同一祖本から派生したものと推察されるが、それらの共通異文は他系統の本文と合致する場合が多く、同系伝本の誤謬を訂しうるケースも少なくない。
- (3) 多和文庫本の本文は書陵部本に次いで同系祖本の姿をよく伝えており、その本文には過渡期的な様相がうかがわれる。資経本・書陵部本との共通異文は前項同様、同系伝本の古態をよく伝えているものが目立つ。それはつまるところ資経本本文の純度の高さを示唆していることにもなる。
- (4) 資経本・書陵部本・多和文庫本の本文は正保版本としばしば対立を見せている。この系統の代表的伝本として長く用いられてきた正保版本の本文は、実は相当に経年劣化が進んだもの

であることが看取される。

- (5) 資経本は書陵部本・多和文庫本と同様、巻末に作者勘物を有している。少なくとも鎌倉末期には作者勘物を付載した伝本が流布していたものと推察される。

- (6) 資経本を利用する際には、常に他伝本を参照し、誤謬本文と純度の高い本文とを十分に見極めた上で活用すべきである。

今後は資経本系諸本についての総合的な考察、また他系伝本をも含めた書承関係の洗い直しが課題となろう。時雨亭文庫本が公開された現在、私家集の本文研究は大幅な再検討が迫られている。『順集』についても家集の成立論ないしは構成論にとどまらず、精緻な本文分析が必要となってきたのではあるまいか。

(注)

- (1) 近年には島田良二・千艘秋男氏『御所本三十六人集 本文・索引・研究』(二〇〇二年 笠間書院)、同『御所本三十六人集(二十家集本) 本文・索引・解題』(二〇〇四年 笠間書院)、同『流布本三十六人集 校本・研究・索引』(二〇〇六年 笠間書院)が出された。
- (2) 『冷泉家時雨亭叢書72 素寂本私家集 西山本私家集』(二〇〇四年 朝日新聞社)「順集」解題(久保本哲夫氏執筆)。
- (3) 『冷泉家時雨亭叢書66 資経本私家集 二』(二〇〇一年)に影印。
- (4) 『冷泉家時雨亭叢書72 素寂本私家集 西山本私家集』(二〇〇四年)に影印。
- (5) 『冷泉家時雨亭叢書16 平安私家集 三』(一九九五年)に影印。
- (6) 『冷泉家時雨亭叢書21 平安私家集 八』(二〇〇一年)に影印。
- (7) 注(6)に同じ。

- (8) 『冷泉家時雨亭叢書65 資経本私家集 一』(一九九八年)解題。
- (9) 神野藤昭夫氏『源順伝』断章「安和の変前後までの官人としての順」(『跡見学園女子大学国文学科報』一二号 一九八四年三月)参照。
- (10) 『大日本史料』の網文検索に際しては、東京大学史料編纂所データベース(<http://www.hiu-tokyo.ac.jp/index.html>)を活用させていただいた。
- (11) ちなみに、康保三年正月十二日には左大臣実頼大饗、十六日には源高明任右大臣初任大饗が催されている。
- (12) 他系統本の伝本名は次の略称をもって示す。
一(2)時雨亭文庫蔵素寂本…素、二(1)西本願寺本(欠脱箇所は部分は書陵部蔵五一・二本に拠る)…西、(2)時雨亭文庫蔵坊門局筆本…坊、(3)宮内庁書陵部蔵「続小草内和歌」(五〇一・四九)…続、(4)時雨亭文庫蔵「源朝臣順集」…朝、(5)時雨亭文庫蔵「順集 白描表紙本」…白。
- (13) 十卷本・二十卷歌合の本文は萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂一九九五年 同朋社出版)に拠る。
- (14) 以下、他歌集の引用・歌番号は断りのない限り『新編国歌大観』による。私家集で第三巻・第七巻の両巻に収められている家集は、③・⑦の符号で区別した。
- (15) 坊・続両本とも「続小草内和歌」の内題を有するが、続本は坊本と上下巻逆構成になっている。坊本には定家の筆で「或本以之為下巻始」「或本以之為上巻始 有其理歟」と加筆されていることから、定家は続本に近い形態の『順集』を披見していたことになろう。
- (16) 拙稿「源順の歌風について―天元二年内裏屏風歌を中心に―」(日本大学第三高等学校「研究年報」二六号 一九九〇年九月)参照。
- (17) 従来の『順集』研究は一類本・二類本の構成を比較し、家集の原態を推定しようとする方向が主流であった。島田良二氏『平安前期私家集の研究』(一九六八年 桜楓社)、新藤協三氏『源順集本文考』(『国語国文』四二巻九号 一九七三年九月、『三十六歌仙叢考』二〇〇四年 新典社所収)、間智子氏「源順集成立考」(『国文』六四号 一九八六年一月)、宮澤俊雅氏「源順集諸本考」(『国語国文研究』八八号 一九九一年三月)、拙稿「源順集」

小考」(『語文』八一輯 一九九一年十二月)など。

〔付記〕 校了間際に宮澤俊雅氏「源順集諸本の親疎関係」(『国語国文研究』一二九号 二〇〇六年七月)の論があることを知った。本稿ではその成果を踏まえることができなかった。稿者の不手際を深くお詫び申し上げる次第である。